

小さいから できる

南富良野高の挑戦

「人前に立つのが苦手だったけど3年間で自分に自信を持てるようになった」。1月下旬の放課後、町立南富良野高3年の藤原悠斗さん(18)は机と椅子が3組しかないがらんとした教室を感慨深げに見つめた。

富良野市山部出身。中学2年まで通った小規模校の山部中が2020年3月に閉校。3年から当時1学年80人ほどだった富良野西中に移った。生徒の多い学校生活に戸惑いを感じ、「登校したくないと思う日もあった」。南富良野高に進んだのは少人数での学びに魅力を感じたからだだった。

藤原さんが高校に入学した21年度の入学者は3人。最初は不安だったが、夏の宿泊野外研修の準備をする中で打ち解けた。カヌー部とカーリング部の両方に入り、22年10月から1年間、生徒会長も務めて学園祭の企画などでリーダーシップを発揮した。「苦手

① 科目・部活に特色



担任教諭と談笑する藤原さん(左から2人目)ら南富良野高の3年生3人

自然生かす学び 生徒増

なことに挑戦できるのが自分の長所だと気づけた」と笑う。町によると、同高は1949年、町立の富良野高幾寅分校として定時制で開校。52年

に現在の校名に改称した後、78年には全日制普通科に移行した。約40年前は1学年50人ほどいたが、21年度の入学者数が過去最低の3人まで減

り、町に激震が走った。

同高には道立高のような明確な募集停止の基準はないが、南富良野町教委は「入学者数が2年ないし、3年連続10人未満が(募集停止の)目安」とする。前教育長の岩淵

秀一副町長(62)は「町から高校をなくせば子どもたちの進学選択肢が狭まる。存続のためには、『高校の魅力化』が急務だった」と振り返る。

学びの柱に据えたのは、21年度から導入された学校設定科目「アウトドア」。地域を支える人材の育成を目指し、町の観光資源である野外活動を通じて、観光振興につながる企画力を養う。大幅な生徒増は望めないが、目が行き届きやすく、野外活動につきまとうリスク管理などが難しくない、小規模校ならではの取り組みを目指した。

部活動は道内の公立校で唯一のカヌー部とカーリング部を強化。競技人口は少ないが、どちらも全国大会の常連だ。22年度には、胆振管内白老町出身のカヌー経験者の姉妹が入学するなど、町外から生徒

を集める役割も担うようになった。

さらに町内外から生徒を呼び込もうと、交流サイト(SNS)で学校の活動を発信する機会を増やし、南富良野中の生徒・保護者向けの説明会も新たに始めた。その結果、22年度の入学者数は18人に。現在は1・3年生計33人が在籍する。

町教委によると、中学時代に不登校だった生徒が進学してくるケースも珍しくない。自然豊かな南富良野町で部活動や生徒会活動、アウトドア授業など没頭できるものを見つけて、自然と学校に足が向くようになる場合が多いという。

同高のスローガンは「小さいからできることがある」。大規模校にはまねのできない柔軟な学びの形を突きつめ、生徒一人一人の個性や能力を育む環境を整えようとしている。

◆ 入学者数の減少で一時は存続の危機に陥った南富良野高。人口約2300人のマチで、「小さい」を武器に生き残りを図る同高の未来を考える。(相武大輝が担当し、3回連載します)